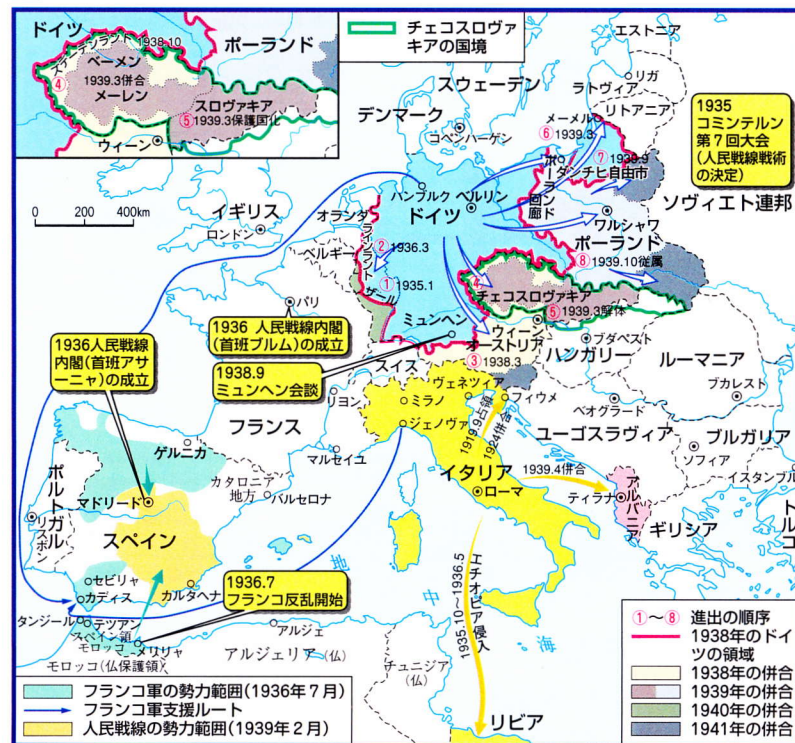


1 イタリア・ドイツの侵略とスペインの内乱



2 スペイン内乱(1936~39)



↑ **フランコ**
(1892～1975)

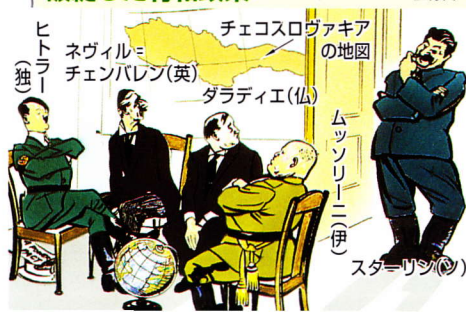
A 内乱への過程

- 1914 第一次世界大戦で中立(～)
1923 プリモ・デ・リベラの軍事独裁
1931 スペイン革命 国王アルフォ
13世が仏へ亡命(ブルボン朝)
1936.2 アサーニャ人民戦線内閣
.7 スペイン内乱(～39.4)
1939 フランコ独裁政権(～75)

B 内乱の構図



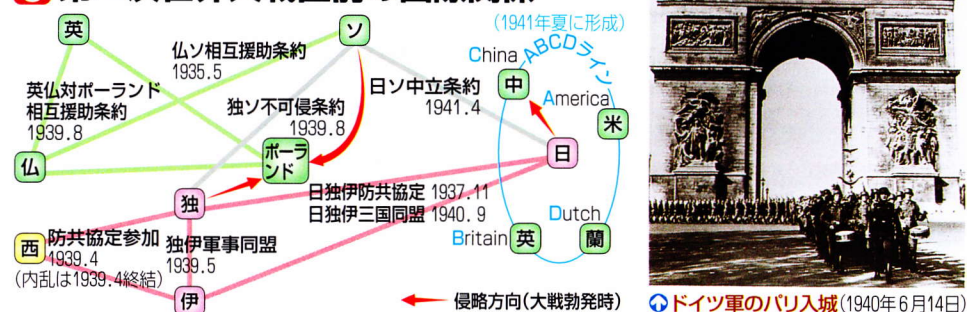
はたん ゆうわ
破綻した宥和政策 —ミュンヘン会談—



1938年9月、ヒトラーのズデーテン地方（チェコの一部）割譲要求に対し開催されたミュンヘン会議で、英・仏はヒトラーの要求を認めた。この会議には当事国チェコスロヴァキアの代表は出席できず、また会議から除外されたソ連は英・仏に対し強い不信を抱くようになった。ソ連は翌39年8月ドイツと独ソ不可侵条約を結び、独の反ソ・反共主義に期待する宥和政策は完全に失敗した。

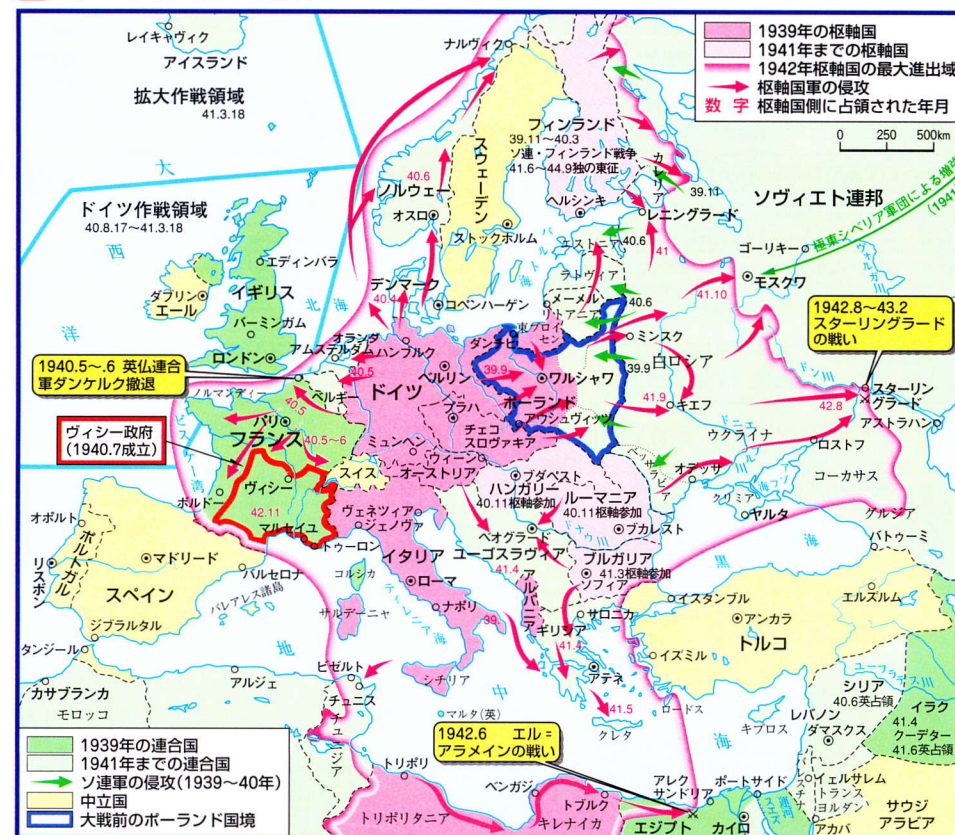
④ミュンヘン会談の風刺画

③ 第二次世界大戦直前の国際関係



④ドイツ軍のパリ入城(1940年6月14日)

4 第二次世界大戦中のヨーロッパⅠ (1939～42年)



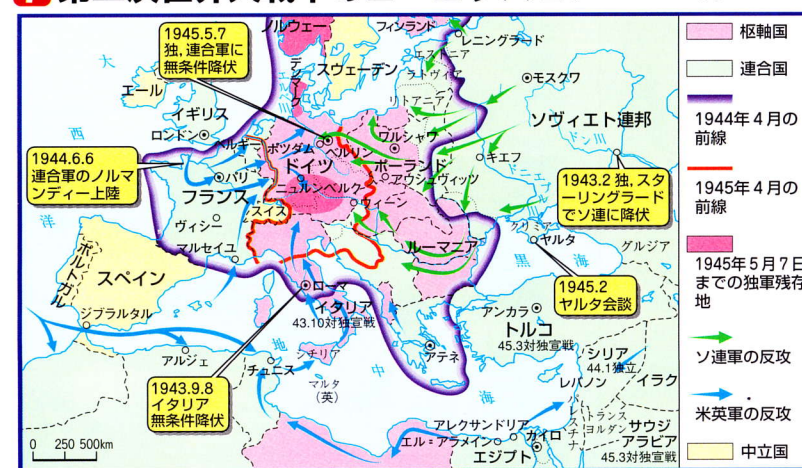
5 第二次世界大戦の交戦国と中立国

連合国	アメリカ・イギリス・ソ連・フランス・中華民国・ウクライナ・オランダ・ギリシア・チェコスロヴァキア・デンマーク・ノルウェー・白ロシア・ベルギー・ポーランド・ユーゴスラビア・ルクセンブルク・カナダ・メキシコ・エキュアドル・エルサルバドル・キューバ・グアテマラ・コスタリカ・ドミニカ・ニカラガ・ハイチ・バハマ・ホンジュラス・アルゼンチン・ウルグアイ・コロンビア・チリ・パラグアイ・ブラジル・ベネズエラ・ペルー・ボリビア・イラク・イラン・インド・サウジアラビア・シリア・トルコ・フィリピン・レバノン・エジプト・エチオピア・南アフリカ連邦・リベリア・オーストラリア・ニュージーランド	(51か国)
枢軸国	日本・ドイツ・イタリア・スロヴァキア・ハンガリー・フィンランド・ブルガリア・ルーマニア・タイ(シャム)	(9か国)
中立国	スイス・スウェーデン・スペイン・エール(アイルランド)・ポルトガルなど	

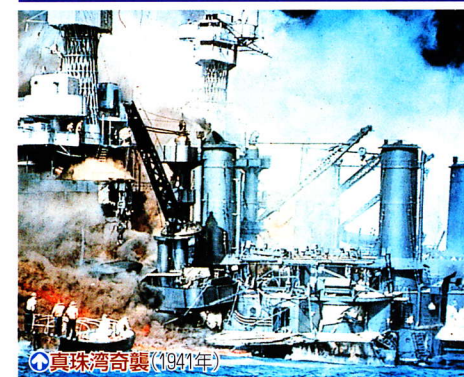
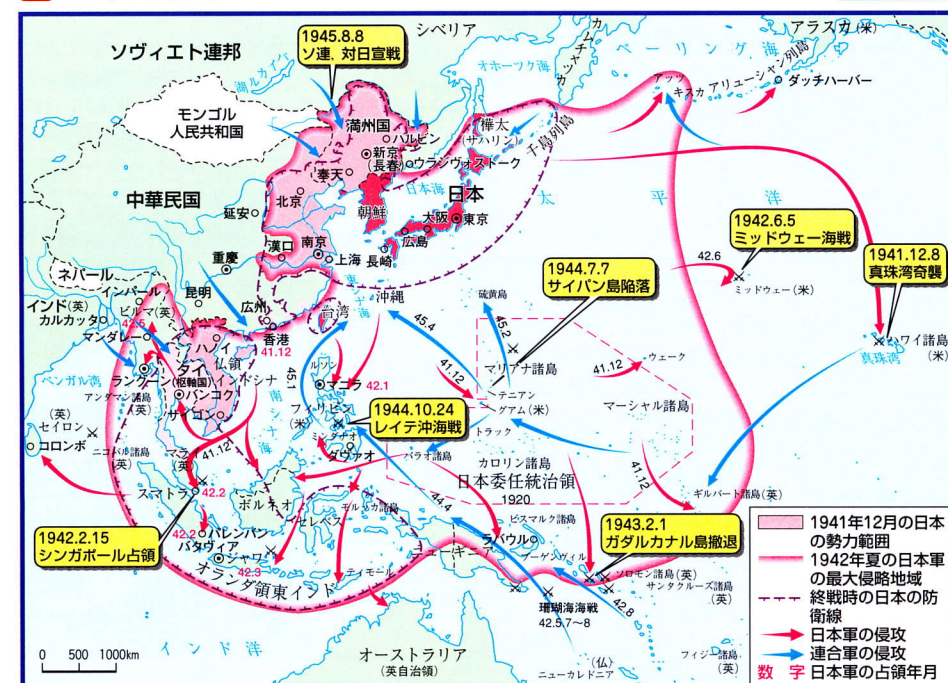
6 第二次世界大戦の経過 (P211年) (P216年)

ヨーロッパ戦線		年	アジア・太平洋戦線	
ドイツの電撃戦と戦火の拡大	9.1 独、ポーランド侵攻(第二次世界大戦の開始)	1939	5. ノモンハン事件勃発(満州国国境で日ソ両軍が衝突)	日中戦争の継続と日米開戦
	9.3 英と仏、独に宣戦布告		7. 米、日米通商条約破棄	
	9. ソ連、ポーランド侵入・バルト3国併合(40)			
	11. ソ連・フィンランド戦争			
	12. ソ連、国際連盟除名			
	4. 独、デンマーク・ノルウェー侵入	1940	3. 汪兆銘の南京国民政府成立	
	5.10 独、オランダ・ベルギー侵入			
	.10 英、チャーチル内閣成立			
	.26 英、ダンケルク撤退開始			
	6. ロンドンに自由フランス政府成立		7. 日、「大東亜共栄圏」構想を発表	
連合国の反撃とヨーロッパの解放	.10 イタリア参戦 .14 独、パリ占領		8. 中国共産党八路軍の攻勢	
	7. 南仏にペタン首班のヴィシー政府成立		9. 日、仏領インドシナ連邦進駐	
	9. 日独伊三国同盟成立			
	米、徴兵制実施			
	3. 米、武器貸与法成立	1941	4. 日ソ中立条約 日米交渉開始	
	3~6. 独・伊、バルカン制圧		夏 ABCDラインの形成	
	6. 独ソ戦争開始 7. 英ソ軍事同盟		12. 日、真珠湾奇襲 太平洋(大東亜)戦争開始	
	8. 大西洋憲章 12. 独・伊、対米宣戦布告			
	11. 連合軍、北アフリカ上陸	1942	2~5. 日、東南アジア各地を制圧	
			6. ミッドウェー海戦(日本海軍の敗北)	
連合国の反撃とヨーロッパの解放	1. カサブランカ会談	1943	2. 日、ガダルカナル島撤退	米軍の進攻と大日本帝国の崩壊
	2. 独、スターリングラードの戦いでソ連に降伏		7. 日、キスカ島撤退	
	5. 独・伊の北アフリカ軍、降伏			
	5. コミンテルン解散			
	7.10 連合軍、シチリア上陸			
	7.25 伊(パドリオ政権)、ムッソリーニ逮捕			
	9. 連合軍に無条件降伏:ファシスト党解散		12. 日、学徒出陣開始	
	11. カイロ会談 テヘラン会談			
	6.6 連合軍、ノルマンディー上陸作戦開始	1944	7. 米、サイパン島占領 10. 米、レイテ島上陸	
	8. 連合軍、パリ解放		11. 米、本格的に日本本土空襲開始	
連合国の反撃とヨーロッパの解放	2. ヤルタ会談	1945	2. 米、フィリピン奪回	
	4. ソ連軍、ベルリン突入		3~4. 米、硫黄島占領・沖縄本島上陸	
	5. ベルリン陥落		7. ポツダム会談	
	独、連合軍に無条件降伏		8.6 米、広島に原子爆弾投下	
			8.8 ソ連、対日宣戦 .15 北方領土侵入	
			8.9 米、長崎に原子爆弾投下	
			8.15 日、連合軍に無条件降伏	

7 第二次世界大戦中のヨーロッパⅡ(1942~45年)



8 太平洋戦争(1941~45年)



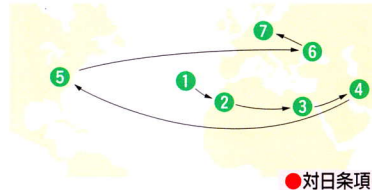
● 第二次世界大戦における「1941年」の意味

1941年、ヨーロッパにおいて独ソ戦争が開始(6月)され東部戦線を形成、太平洋方面では日米が開戦(12月)しアジア・太平洋戦線が形成されることで全世界に戦火が拡大した。同年3月以降、アメリカは武器貸与法で連合国を支援していたが、12月の参戦で大量の兵士をヨーロッパ戦線に投入することとなった。



1 連合国の戦争処理会談

米・英・ソ・中の首脳
 米：F＝ローズヴェルト(ポツダム会談はトルーマン)
 英：チャーチル(ポツダム会談は途中からアトリー)
 ソ：スターリン
 中：蔣介石

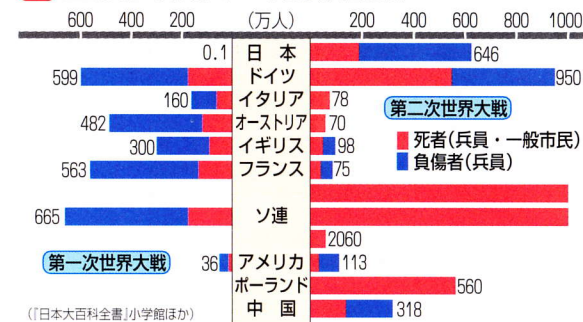


①大西洋上会談 1941.8 [米・英]	●対ドイツ戦争とソ連援助問題を協議 ●「大西洋憲章」の宣言
②カサブランカ会談 1943.1～3 [米・英]	●対イタリア作戦(シチリア島上陸)を決定 ●敵国の無条件降伏の原則を表明
③カイロ会談 1943.11 [米・英・中]	●日本の領土問題の処理方針と、無条件降伏まで戦うことを宣言(カイロ宣言)
④テヘラン会談 1943.11 [米・英・ソ]	●対ドイツ戦争方針(北フランス上陸による第2戦線の形成)を確認
⑤ダバートン・オークス会議 1944.8～10 [米・英・ソ]	●国際連合設立の原則と具体化案作成(1943年のモスクワ宣言に基づく)
⑥ヤルタ会談 1945.2 [米・英・ソ]	●対ドイツ戦争処理を協議 ●ソ連の対日参戦と南樺太・千島列島譲渡(ヤルタ秘密協定)
⑦ポツダム会談 1945.7 [米・英・ソ]	●ポツダム協定(対ドイツ処理方針) ●ポツダム宣言(対日本無条件降伏勧告)

●ヤルタ会談 1945年2月、クリミア半島の保養地ヤルタで行われたこの会談で、病身で体力的限界に達していた米大統領ルーズヴェルトがスターリンに示した多大な譲歩は、戦後の「冷戦」の起点になったとされる。ルーズヴェルトは同年4月、大戦終結前にこの世を去った。



2 主要交戦国の死傷者数



3 原子爆弾投下の是非 (P63, 195)

①解説 スミソニアン航空宇宙博物館(ワシントン)の原爆展(1995～98)をめぐる、被害者側としての日本と、軍国主義に対する自由の勝利という愛国心を訴えるアメリカとの間の歴史観の相違が明らかとなった。

肯定論	否定論
●原爆投下により戦争終結が早まり多くの命が救われた。原爆を投下しなければ日本本土にアメリカ軍が上陸し戦場で100万人の死傷者が出たであろう。	●1945年8月時点で、日本軍は兵力・石油・食糧が不足し戦争を続けられる状況ではなかった。原爆を投下しなくても日本はまもなく降伏し戦争は終結した。
●原爆投下がなければ戦争が長引きソ連軍の日本侵攻を招いて、戦後処理は混乱し、資本主義国日本の経済発展はなかったろう。	●広島・長崎合わせて約30万人の一般市民を殺したのは残虐行為。
●真珠湾を奇襲し戦争を始めたのは日本。日本軍の侵略や残虐行為に対し原爆投下は当然。植民地独立を早めた。(中国・東南アジアの声)	●日本の降伏を早めるためなら、原爆を日本近海に投下し威力を示すだけで十分であった。
	●ソ連に対し戦後処理を有利にするための脅しとして原爆を投下した。
	●一種の人体実験であった。

レジスタンス 各国の抵抗運動

大戦中ファシズムの支配下におかれた仏・伊・ユーゴスラヴィアなどではレジスタンスが盛んに展開された。その情報収集・破壊活動や組織的武力闘争は、連合軍の作戦行動に貢献する機会が多かった。

●バルチザン闘争を指導するティト (1892～1980)

ドイツ軍を独力で駆逐、ユーゴスラヴィアを解放した。



①解説 第二次世界大戦中、日本の占領下の南・東南アジア各地では、チャンドラ・ボースのように日本に協力した人物もいたが、多くの指導者は抗日運動を展開した。中には大戦後、旧支配国(英・仏・蘭など)の影響力低下・社会主義陣営の支援などにより、民族解放闘争に転じる場合もあった。



●アウン・サン(左)とホー・チ・ミン

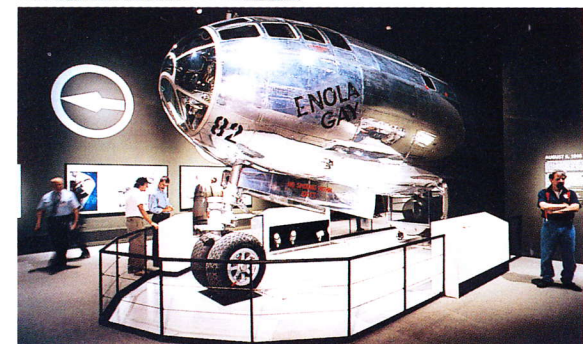
前者は反ファシスト人民自由連盟、後者はヴェトナム独立同盟を指導し、日本に抵抗した。

●金日成(1912～1994) 朝鮮人民革命軍を率いて北部山地帯でゲリラ戦を展開した。



●広島に投下された原子爆弾 (P195号) (1945年8月6日)

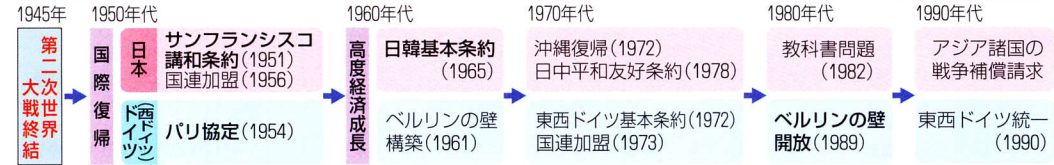
●スミソニアン航空宇宙博物館の原爆展(1995～98年) 原爆開発の過程と原爆を投下したB29エノラ・ゲイ号を展示しただけで、日本の被害状況や原爆投下の軍事的要因については全く触れなかった。



A 戦後50年の軌跡

第二次世界大戦が終結し半世紀が過ぎた1995年には、戦争に係わった世界各国で終戦記念の行事が催された。しかし、本来は世界平和の永続を願うべきである記念行事が、アメリカの原爆展や日本の国会決議にみられるように、国家間の新たな対立や不信を招く場合もあった。戦後50年を経て、経済では国家間の枠が薄らぎ緊密さが増しているのに対し、政治・文化の点では、民族・国民意識が大きく影響して対立は消え去っていない。戦争の記憶の背後にある各国のナショナリズムと戦後50年の軌跡がそこに反映されている。

B 戦後の日本とドイツ



1 ドイツの戦時政策から戦後まで



映画「シンドラーのリスト」
(米・1993年製作)



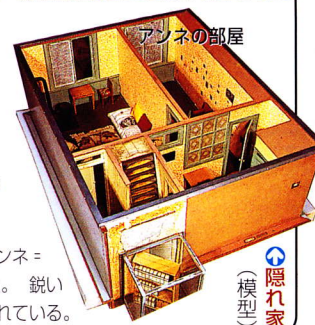
アウシュビッツ強制収容所跡(ビルケナウ 現ポーランド)
アウシュビッツでは110～150万人が虐殺された。



アンネ・フランク
(1929～45)

ナチスのユダヤ人迫害

ナチスによるユダヤ人迫害は、大戦中激しさを増し、ドイツ占領下の各地に建てられた強制収容所のガス室などで、約600万人の人々が大量虐殺(ホロコースト)されたという。ユダヤ系ドイツ人少女アンネ・フランクは、1945年3月強制収容所でチフスのため15年の生涯を終えた。鋭い感受性と社会批判でつづられた『アンネの日記』は、今も世界中で愛読されている。



アンネの部屋

(模型)

ニュルンベルク裁判 (1945年11月～46年10月)

第二次世界大戦後、連合国は戦争犯罪・責任を追求するため史上初の国際軍事裁判を設定した。ニュルンベルク裁判では、ゲーリング航空相などナチスの指導者22名が戦犯として裁かれ、このうち12名が死刑となった。



ゲーリング
航空相
ヘス副総統
ロップ外相
リッペン
外相

終戦記念式典(1995.5.8)

「5月8日は自由の勝利の日であり、欧州の欧州に対する勝利の日である。その意味では我々は1つだ。……歴史が欧州統合を求めている。始めた仕事は続けなければならない。」
(ミッテラン仏大統領 ベルリンにて)

フランスの終戦記念式典(パリ)

凱旋門の前でパレードが行われ、ドイツ国旗を掲げるドイツ軍兵士も参加した。



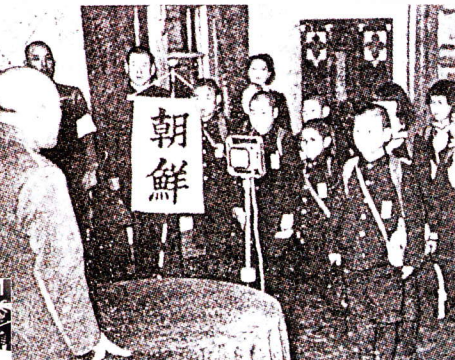
ドイツ軍兵士

2 日本の戦時政策から戦後まで

日本占領地の皇民化政策

「大東亜共栄圏」を唱えた日本は、日中戦争・太平洋戦争の中で占領地の住民に対し日本文化を押しつけ、戦争に協力させるための皇民化政策を展開した。

神社参拝 靖国神社参拝のために訓示を受ける朝鮮の児童。朝鮮では他に「創氏改名」など特に強い皇民化政策が行われた。



朝鮮における植民地政策

- 日本語の強制 徴兵制
- 創氏改名 (日本式の姓名に改める)
- 神社参拝 (朝鮮神宮などへの参拝)
- 強制連行 (日本国内での重労働)
- 従軍慰安婦の徴用



東京裁判 (極東国際軍事裁判・1946年5月～48年11月)

侵略戦争を行った罪で裁かれ、A級戦犯の東条英機ら7名に死刑が宣告された。しかし、当時の戦犯裁判は戦勝国の独断で行われる場合が多く、B・C級戦犯の中にはろくな審理も受けず、現地で処刑された人も多かった。

南京大虐殺記念館 30万人が虐殺されたとしている。



解説

戦後の米ソ冷戦の中で、日本はアメリカの重要な同盟国として、戦争責任が寛容になり、戦争に係わった官僚・政治家が戦後も職に就いた。そして、アメリカとの同盟関係を最優先にして急激な経済成長を成し上げたことは、近隣アジア諸国に対する軽視につながった。日本政府は戦争責任・補償は解決済みとしているが、1980年代以降、アジア諸国で個人補償を日本政府に求める動きが起きている。